

ラットのサーモグラフィ。
 尾の皮膚温が重要なポイントです。
 (カラーでお見せできないのが残念)

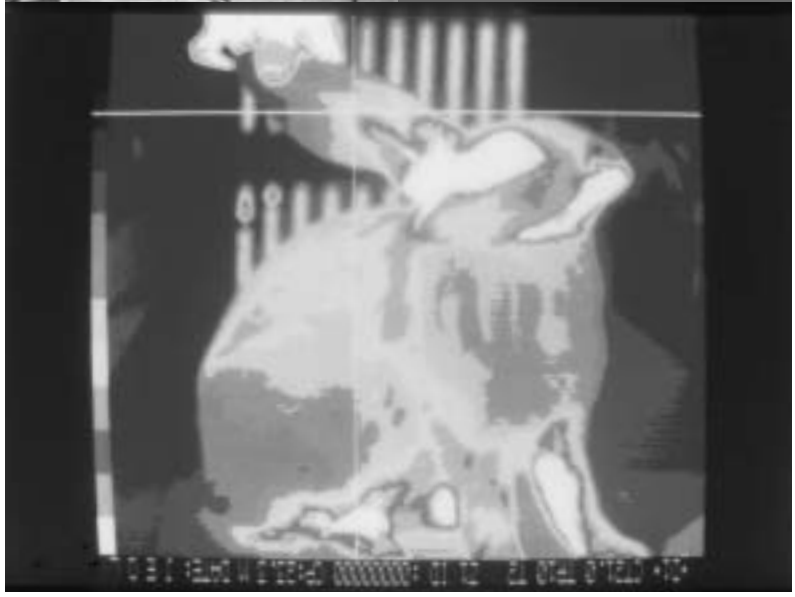
ケージ内温度と飲水量を測定中。



ケージの天板をとって、ちょっと拝見。



ウサギの耳の温度を測っています。
 少し寒そうです。



SYUNKEN
駿建

1998.11 Vol.26 No.3 秋期号
 日本大学理工学部 建築学科
 短期大学部 建設学科建築コース

実験動物って知っていますか？ 私たちが日頃安心して薬を使えるのも、バイオテクノロジーを駆使した最新の医療技術を利用できるのも、こうした実験動物たちの存在に支えられているのです。でも、彼等からもたらされる研究成果が信頼のおけるものであるためには、彼等の飼育されている環境も十分に制御されていなくてはなりません。こうした実験動物飼育環境も建築環境工学の研究分野の一つなのです。
 (助手・蜂巢浩生)

学生座談会 卒業制作への提言

最近の卒業制作は低調だ、という意見が建築教室内でよく話題になっている。そのため、教室側としても、優秀作品集を作成したり、講評会を行ったりと、さまざまな工夫を試みてきた。元来、卒業設計は4年間の学生生活のまとめとして、自ら問題を提起し、それに応える提案を作成するものと位置づけられ、そのため必修とされてきた。しかし、近年は履修単位の一つといった程度にしか受け止められていないのが現実のようである。一昨年は、そうした背景から、もう一度卒業設計を考え直し、次のような改良を試みた。

出席者

鈴木幹彦(斎藤研 M1)

大山亜紀子(片桐研 M1)

大杉彩夏(石丸研 M1)

佐藤崇文(高宮研 M1)

福田剛之(若色研 M1)

司会 大川三雄(編集委員)

1. 名称を卒業制作と改訂
2. 提出は1回とし、2次提出を廃止
3. 高評価作品の公開展示
4. 展示作品の公開講評会
5. 優秀作品集を卒業式前に完成、当事者に配布

こうした改良の成果はどうであったのか。今回は、当事者である学生(現・大学院1年在学生)の方々に話を伺った。

テーマへの取り組み

司会 「駿建」の誌面を学生さんにも開放したい、という意図から始まった新企画です。今回は、卒業制作について、一昨年実際に体験されたばかりの方々に、ご意見を伺うことにしました。

最初に、自己紹介をかねて、どのようなテーマで、どのように取り組



大山亜紀子さん

んできたのかを一言聞かせて下さい。

大山 私の場合は卒業制作を進めていくにあたって、研究テーマであったベトナムの仏教寺院をどうやって卒業制作とからめるかという点で悩みました。

結局、夏にベトナムに調査に行った経験から、調査・修復に関する資料を一般公開するための資料館を設計することにしました。現地では調査に追われて卒業制作の資料を集める時間はありませんでしたし、そのときの調査は研究とは直接関係のない明命帝陵という修復現場でしたが、いろいろな体験をしました。そうした経験から新しく何かを設計するというのではなく、その文化財をどう生かすかという方向に考えが進み、最初に決めていたテーマとは少し違うものになってしまいました。

最終的にできたものは自分で設計

した図面はほとんどなくて、あれは調査レポートに近いものだと思っています。

鈴木 大スパンの空間と構造をテーマにしたパス・ターミナルの設計をやりました。

わたしの研究室では、4年生は卒業制作のために10月の1か月間は研究室関係の仕事から解放されて、卒業制作にかかりきりになれるという環境にありましたが、それぞれ自分たちのやっている研究テーマと卒業制作をどうリンクさせるかということにみんな苦労していました。自分もそうですけど、うまくリンクしたという人は少なかったのではないかと、という印象を受けました。

大杉 私は既存建物の制震改修をテーマとして取り上げました。

実は、卒業研究とは別に卒業設計をきちんとやろうと考えていたのに、私たちの代になって設計ではな

く、制作だといわれてがっかりしました。それで、副指導の先生とも相談し、もう意匠のことは捨てようと、今年から初めて制作に変わったんだし、地震があって、先生方もちょっと興味を抱かれているし、ある程度のプレゼンで見栄えをよくして、わかりやすい表現をして説得性をつければ多分いけるんじゃないかと思って出しました。

研究とプログラムと解析をして、ちょうど制作の1~2週間前に学術講演会の論文締切りがあって、それまでに私たちの研究室はOHPと論文を作っていたので、それを書き直して並べ、あとはうちの得意の振動模型をあまり振動模型にみえないように作ろうと思い、あのような提案になりました。

福田 僕は企画経営コースで、卒業企画設計のほうですが、テーマとしては大田区の町工場の再生をやりました。

内容は具体的に現地のサーベイを行って、その結果から大田区に一体何が必要なのかということを通り出そうという方向で、社会的背景をうまくピックアップしてきて、それに自分の提案を組み込んでいこうということと設計を進めました。自分として4年間やってきた内容をどう生かしていこうかという総まとめの場として捉えていて、それはできたかなという感じです。

佐藤 テーマはお茶の水駅の再生計画でした。卒業制作を終えての感想としては、4年間建築をやってきて自分なりに疑問があるわけだから、やらされているのではなくて、自主的にやるのが大切だということを実感しました。

大学の4年間というのは、専門学校との違いで、技術を習いにきているのではなくて考え方を習っているわけですから、柱割りがどうだとか

そういうことは現場に出れば覚えることですから、それよりも、や

はり4年間やってきた上での、自分の問題意識に対してどういう答えを出すのか ということが卒業制作のポイントだと思います。

早く自分のやりたいことを明確にすべきですし、構造に行くなら構造、設計をするなら設計をする、自分が何をやりたいというスタンスを出してから始めないと、中途半端なものになってしまうことを実感しました。

卒業設計？ 卒業制作？

司会 研究室ごとに研究テーマに応じた制作物を卒業設計としてまとめる、というのは他の大学の卒業設計と比較すると、かなり特徴的だろうと思います。

この点について、皆さんがどう受け止められたかを聞かせて下さい。大山 私の場合は設計に興味がないわけではありませんが、見切りをつけて、研究のほうに力点を置いて進めてきていました。でも、やはり制作という設計のイメージがあって、一応、今まで自分がやってきたことの反映として何かを設計しようと思ったのですが、レポートのレベルで提案としては何もなかった。でも、ああいう形で、先生に評価していただき、研究を論文とは違った形で表現するという可能性のようなものは感じました。

鈴木 個人によってどう捉えたかは違うと思いますが、僕は正直いって、とくに制作ということにこだわっていませんでした。名前が変わったぐらいかなと思っていました。

司会 先程の話で、大杉さんは設計と研究の両方をやることに期待していたということでしたが、もう少し補足して下さい。

大杉 私たちの先輩がやったのは卒業設計でした。ですから、私は卒業設計をやるものだとばかり思っていました。しかも、構造系の分野で就



福田剛之君

職してしまったら、一生、設計はしないことが多い。図面を書くこと自体が多分最後になると思っていました。だから悔いの残らないようにしたいと思っていました。

ところが4年になったら、設計ではなく、制作に変わってしまった。簡単な違いかもしれないけど、研究的なもののプレゼンでいい、プレゼンの仕方でもビデオでも何でも良いといいます。ということは、構造系の人はそうしなければいけないというか、そうしなさいという強制に聞こえました。すごく嫌でした。

卒業設計で心の整理をするつもりで、研究室は構造系に行こうと思っていました。研究とは別のものをやりたかったし、どちらもきちんと勉強して、その上で大学を終わらせたかった。研究をそのままプレゼンに変えただけでできてしまうような卒業制作というのはどうも納得できません。桜建賞をいただいておりますが、こんなことをいうのもおかしいのですが.....。



佐藤崇文君

必修？ 選択？

佐藤 僕の卒業研究は駅舎で、制作とからめてあるのですけど、うちは設計が先ですから、10月に提出というのはきついなという気がしました。実際には、大学院試験や就職活動といった事情があって、実際に手を動かすのは夏を過ぎてからということを考えて、提出時期がおかしいのではないかとというのがみんなの意見でした。

それから3年の後期の段階で設計を選択にして、その時点で設計をとる、とらないというスタンスを学校側が提示しているわけだから、4年になっていままさら何で設計か、一度、設計をやめさせておいて、またやるのか、という点が気になります。

意匠系の人には卒業研究をきちんとやっていないという話もありますけど、設計をやりたい人は設計をやればいいんであって、別に研究はやらなくてもいいと思います。研究をやりたい人はそっちに100の力をだせばそれでいい。研究と設計を分けて10月と2月が提出時期になっているけど、両方必修にする意味がない。デザイン中心の計画系の人には、あまり研究に対して重心を置いていないわけではないと思います。大杉 私も佐藤君の言うように、どちらかの選択にするほうがよいと思います。もしそうだったら、私は違う研究室を選んでいたら、同じ研究



鈴木幹彦君

室でも、違うテーマを選んでいたらと思います。

中途半端な制作というのはちょっと気持ち悪い。

大山 二つの必修を兼ねるのは大変だから時期をずらすというのはわかるとして、どうして設計が先で研究が後というのがわからないし、計画系の設計を重視している人たちは、設計した後、何をしているんだろう、やっている人はやられているのでしょうか、残りの半年間が空白として残るわけじゃないですか。

それはもったいないと思うし、以前あった2次提出も今年はなくなりましたし……。

司会 2次提出があるということ、徐々に本提出としての1次提出のレベルが落ちてしまったという経緯があります。佐藤さんは、2次提出があったほうがよかった？

佐藤 2次提出があれば、それなりに頑張ったと思います。どこかで半強制的に出させるということは必要で、優秀案だけでなく、1次提出で完成度の低いものに関しても再提出という形で出させれば、2次提出の意味があると思います。

鈴木 私も選択で、どちらかひとつを選んだほうがいい。

3年の後期の時点で設計製図が選択になっていますし、3年の後期から構造系の人というのは構造設計をとって設計演習をとらない、計画系にいく人は設計演習をとって構造設計をとらないというような、全員が全員ではないけども、そのように分かれてくるので、基本的にどちらか選択にしたほうが力を出せるような気がします。

司会 両方ともを必修でやったことのメリットというのは感じていない？

佐藤 メリットがないというわけじゃない。やったということはゼロではない。ただ、それに使う労力が違う。軽くみてしまう。本は読んで

も、形に出すか出さないかで、意匠系、計画系は本を読んでレポートで終わる。構造系の人はいもう一歩進んで自分なりに出してくる。

でも、どちらかのほうが絶対がいい。

司会 両方必修にしていることの意義のひとつは、構造系に進んだ人達にも最後にもう1回何かまとまった作品に取り組んでほしいという期待があるのだと思う。

大杉 それでしたら、なぜ制作にしたのですか。研究のプレゼンを変えるだけになってしまうから、意匠の人と同じで、3月まで研究するはずが中途半端になってしまう。

福田 研究と設計を分ける必要があるのですか。僕は分ける必要がないような気がするんです。

設計やるよといったって、それを作るのにはやはりいろいろ背景とか調べたりすると思うんですよ。それ自体が研究活動ではないかと思えます。だから、最終的なアウトプットが図面であろうとレポートであろうと、僕はいいと思います。

それが自分の考える建築にどうつながっていくのか、が重要なことから、必修といって二つを並行してやらせるのは無理だし、僕自身、研究と設計は一緒にやろうと思っていました。最後はスケジュールの問題で、10月提出、研究は1月、2月ということで噛み合わないで切り離しましたけど……。

スケジュールへの提言

司会 どちらかひとつを選択するという考えに賛成の方が多いようですが、現行どおり両方を必修でやるとして、提出時期、スケジュール等についての提案はありませんか。

佐藤 制作を先にやりたいですね。1か月くらいずらして論文をまとめたい。

鈴木 内容がリンクしてくると、結

局一つのことをやっているわけですよ。だから、分けた話ではなくて、一本化してきますから……。

大山 佐藤君の言ったように、論文でも制作でも提出したあとに1か月ぐらいの間を置くのがいいのかなと思う。例えば、ひとつは12月に提出し、もう一つは1月か2月に提出させる。どちらが先かは、研究室ごとの判断にまかせる。

大杉 設計ではなくて制作といっているわけですし、構造の人に設計をやらしてあげようという当初の目的がないんだから、間を1か月ぐらいあけてまとめ直す期間にすればいい。

司会 でも、構造系の人設計をやってはいけないという決まりはないよね。なるべく研究とリンクしたほうがいいという説明をしているけど……。

大杉 制作という名前にしておいてそういう言い方はないと思う。もう卒業制作なんだから、卒業設計だった時代は忘れて、リンクさせるなら完ぺきにリンクさせたほうがいい。

指導態勢について

司会 指導態勢についてはいかがですか。基本的には卒業制作というのは自主的に行うことを前提としていますが……。

佐藤 指導はしてもらわないと、4年で研究室に入った意味がない。4年から研究室を選ぶというのがすでに遅いんじゃないかと思いますが……。今年から始まる3年のプレ・ゼミは大賛成です。副指導ってあまり意味がないと思う。ただ、計画系だったら構造の先生がつくわけだけど、持って行って話を聞こうとしてもあまり聞いてくれない。

僕は自分の立場でしかわからないけど、計画系ではこういう考えがあります、じゃあ構造的にどういふものが取り入れられますか、というよ

うな話があるんならいいんですけど、わかってくれなさそうです。

福田 僕は逆にもう全体指導は全体の流れを説明する程度で、あとは実際に一人の担当の先生がつくから、正副というのではなく、ある一人の先生とやりあうという感じでした。

ただ、先生と話してもそう変わるものでもないし、むしろチェックとしてではなく、自分が行き詰まったときに相談できる環境であれば、それでいいと思います。

大杉 無理に、副指導は誰ですとかいうのじゃなくって、聞きたかったら自分でいろいろな先生の所へ行って聞けばいい。

鈴木 でも、何月何日指導、というハンコをもらうわけですね。相当やる気のある人は別として、大方の人はあれがあるからやるわけで、なかったらやらないんじゃないですか。佐藤 ハンコは関係なしに指導を受けたいときに受ける。ハンコをもらうために作ってもっていくというのはちょっと違う気がします。

大山 副指導の先生に関しては、私の場合もあまり意味がなかったように思います。いろいろとアドバイスをしてもらえれば意見として取り入れたいと思っている部分はあるけど、やはりそこまではいかない。指摘していただいたのがかなり専門的というか技術的なことばかりで、庇勾配をどうするかといったことばかりで……。

公開展示と公開講評会

司会 昨年の試みとして評価作品の公開展示と公開講評会をやったんですが、それについての感想は？

佐藤 昨年は先生が学生の作品の説明をしていましたが、生徒にプレゼンさせたほうがよかった。それがないと、妙に深く読む先生がいらして……。学生が考えもしていないことを深読みしている。



大杉彩夏さん

プレゼンはすごく大事で、アウトプットの見栄えが悪くても、こういふことがこのA4のレポートの中には詰まっているんです、というのが生徒の側から言えますよね。

それと昨年は講評会もなくってつまらなかった。講評会はあったほうがいいし、全員ではなくて、絞ってきた最終段階でもいいから、ある程度生徒に発表の場を与えるのがいい。司会 企画設計のほうはいかがですか。

福田 今回、建築の講評会に参考程度に少しは出たと思いますけど……。評価の段階でも、企画の数人の先生だけで評価してしまうというのがあるんです。広い意味で、構造系とかの話あまり聞けない状況にあると思います。

だから、最終の評価の段階では建築と企画と一緒にしないと弊害が出てくるのではないかと思います。

佐藤 研究室によって盛り上がりが変わりますよね。先生が乗り気の所は結構全体に志気が上がって面白くもなるし、やはり何人が一生懸命やってくるのがいれば全体に盛り上がるし、やる気のないのが集まれば、やはり全体的に質が低下してしまう。学生の自主性はもちろんですが、気分を上げるも下げるも、先生次第という気がします。

司会 今日は、かなり本音に近い話が聞けたように思います。

どうもありがとうございました。

(文責：大川三雄)

1998年度 日本建築学会大会(九州) 建築学科教室関係者発表論文リスト

本年度の建築学会大会は、さる9月11日(金)から13日(日)までの会期で、福岡市の九州産業大学で開催された。発表論文総数は5,998題、教室の先生方や大学院生、この春から社会人となった大学院OBの多くが福岡に集合した。まだ上着を着けるには努力が必要な気候のなかを、リクルートスーツ(?)に身を包んで、緊張気味の大学院生の姿が目立った。

材料施工、構造、防火、環境工学、建築計画、農村計画、都市計画、建築経済、建築歴史・意匠、海洋、情報システム技術、建築教育の計12部門に分かれて行われた学術講演のなかで、教室関係者の発表論文を抜き出したものを以下に紹介する。それぞれの論文題名から、いま各研究室が取り組んでいる研究テーマの一端を知り、とくに平成11年度卒業予定の現3年生諸君は、来年の卒業研究テーマ選択の参考にしていただきたい。

本年度建築学会の重点課題の一つは、初日の午後に行

われた総合研究協議会の「建築における持続可能性とは何か」に代表されるような、地球環境というグローバルな視点で建築におけるSustainable Developmentを議論することであった。この研究協議会では各研究分野からピックアップされたパネリストにより、建築におけるSustainability: 持続可能性がいろいろな視点で議論され、大変興味深いものであった。昨秋のCOP3京都会議において建築学会会長声明が発表され、このなかで建築における生涯CO₂排出量を、新築で30%削減が可能であることを述べた。そのためには、建築の耐用年数を現在の3倍に延長することが不可欠だとしている。現在、これを実現するための方策が特別研究委員会で検討されている。

この他、「日本の建築教育の将来を考える - 現行制度の下で職能教育プログラムは可能か - 」という重要なテーマの研究協議会も行われた。(編集委員会)

印 発表者 *印 ポスターセッション

材料施工

- 1459 高流動コンクリートのコールドジョイントに関する基礎的実験研究(その5. 塩化物イオン浸透生と鉄筋腐食) 山本祐基子(三菱建設)・藤井和俊・毛見虎雄・清水五郎・佐久田昌昭・宇仁菅康行・柳澤敦志
- 1460 高流動コンクリートのコールドジョイントに関する基礎的実験研究(その6. 打足し時間間隔の限度を判定する簡易試験方法) 藤井和俊(三菱建設)・毛見虎雄・清水五郎・佐久田昌昭・宇仁菅康行・柳澤敦志・山本祐基子

構造

- * 20394 セメント系砂質改良土の強度・変形特性(その2. 排水せん断強さ) 山田雅一(日本大)・安達俊夫・星 智典
- * 20395 セメント系砂質改良土の強度・変形特性(その3. 非排水せん断強さ) 星 智典(東京電力)・安達俊夫・山田雅一
- 20442 アイスドーム構造の使用限界に関する一考察 その1 クリープに対する使用限界 田中寿幸(日本大大学院)・小泉 豪・半貫敏夫
- 20443 アイスドーム構造の使用限界に関する一考察 その2 氷の昇華に対する使用限界 小林篤志(日本大大学院)・田中寿幸・小泉 豪・半貫敏夫
- 20505 ヴォールト型張力膜構造における支持架構の膜による安定化に関する実験的研究 力瀬康介(太陽工業)・斎藤公男・黒木二三夫・宮沢幸江
- 20506 ヴォールト型張力膜構造における応力弛緩現象に関する実験的研究 松田 仁(日本大)・斎藤公男・黒木二三夫・力瀬康介

- 20508 木造張弦梁構造の構造計画に関する基礎的研究(その1)クリープ性状に関する実験的研究
小野塚真規(三井木材工業)・斎藤公男・岡田 章
- 20509 木造張弦梁構造の構造計画に関する基礎的研究(その2)ストリングの最適張力の設定について
松崎彦英(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・小野塚真規
- 20510 ケーブル金物の設計法に関する基礎的研究(その1)ケーブル金物の設計法の現状と実験概要
中村 伸(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・竹川正慶
- 20511 ケーブル金物の設計法に関する基礎的研究(その2)ケーブル金物の把握力の評価
金子みゆき(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・竹川正慶
- 20512 ケーブル金物の設計法に関する基礎的研究(その3)ケーブル金物の設計法に関する一考察
竹川正慶(西松建設)・斎藤公男・岡田 章・中村 伸・浜崎勇二
- 20517 ケーブル長固定方式による張弦梁の施工特性に関する研究
安間由倫(前田建設工業)・立道郁生・畑戸龍夫・平松幹夫・小室紘和・斎藤公男
- 20518 ファサードに用いるテンセグリック・トラスの力学特性に関する研究(その1)テンセグリック・トラスの概要とone-way systemの基本力学特性
今村柳輔(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・田中佳奈子
- 20519 ファサードに用いるテンセグリック・トラスの力学特性に関する研究(その2)ジョイント部のケーブルの滑りの影響とtwo-way systemの基本力学特性
田中佳奈子(石本建築事務所)・斎藤公男・岡田 章
- 20524 腐食雰囲気下におけるMJGガラス支持構造に用いられた二相ステンレスケーブルの諸特性
田川英樹(神鋼鋼線工業)・斎藤公男・水口 茂・方 蘇春
- 20527 矩形平面を有するテンション・グリッド・ドーム(TGD)の力学性状に関する基礎的研究(その1)基本力学性状
大野貴信(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・久保田 淳
- 20528 矩形平面を有するテンション・グリッド・ドーム(TGD)の力学性状に関する基礎的研究(その2)大変形・全体座屈性状
久保田 淳(鹿島建設技研)・斎藤公男・岡田 章
- 20529 ストリングを面外配置したテンション・グリッド・ドーム(TGD)の力学性状に関する実験的研究(その1)PS導入実験および静的載荷実験
鈴木 実(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・細澤 治・大野貴信
- 20530 ストリングを面外配置したテンション・グリッド・ドーム(TGD)の力学性状に関する実験的研究(その2)実建物における振動実験
細澤 治(大成建設)・斎藤公男・岡田 章・小竹達也・鳥村高平・大野貴信
- 20539 テンションリングを有する放射型ケーブル屋根構造の力学特性に関する研究(その4)小規模模型による基本振動性状の把握
金田崇興(日本大大学院)・斎藤公男・岡田 章・今井克彦
- 20544 小規模なテンポラリー・スペースに関する一考察(その1)～システムの分類と評価～
田中 晃(太陽工業)・斎藤公男・黒木二三夫・村上 隆
- 20545 小規模なテンポラリー・スペースに関する一考察(その2)事例を通じてのT.S技術の評価～習志野ドーム～
村上 隆(日本大大学院)・斎藤公男・黒木二三夫・田中 晃
- 21153 近傍地盤の不均質性を考慮した平均化水平地盤ばね
池田能夫(大成建設)・下村幸男
- 21215 確率過程によるバイリニア型粘性ダンパーの応答について
大杉彩夏(日本大大学院)・石丸辰治
- 21253 ゴム球支承を用いた対震構造システムに関する基礎的研究 その1. ゴム球の静的構造性能検証実験
大庭 章(日本大大学院)・新谷隆弘・石丸辰治・秦 一平・魚津忠弘・久保田雅春
- 21254 ゴム球支承を用いた対震構造システムに関する基礎的研究 その2. ゴム球支承の動的転動実験
吉田泰光(日本大大学院)・新谷隆弘・石丸辰治・秦 一平・魚津忠弘・大庭 章・久保田雅春
- 21255 ゴム球支承を用いた対震構造システムに関する基礎的研究 その3. ゴム球支承の動的転動実験の評価
魚津忠弘(日本大大学院)・新谷隆弘・石丸辰治・大庭 章
- 21412 増幅機構を用いた制震構造システムに関する基礎的研究 その4 トグル機構の振動実験
久保田雅春(飛鳥建設)・石丸辰治・新谷隆弘・秦 一平・大庭 章
- 21424 パッシブ型制震構造物の動特性と応答予測(その1. モーダル粘性減衰とモーダル塑性率)
江原栄次(川田工業)・石丸辰治・藤本元久・森川和彦
- 21425 パッシブ型制震構造物の動特性と応答予測(その2. 3質点系の固有値問題からみた動特性)
岡本博通(東急設計コンサルタント)・石丸辰治・江原栄次・藤本元久
- 21426 パッシブ型制震構造物の動特性と応答予測(その3. 実際建物における応答予測)
藤本元久(日本大)・石丸辰治・新谷隆弘・江原栄次
- 21427 パッシブ型制震構造物の動特性と応答予測(その4. 梁降伏型骨組構造物の動特性について)
森川和彦(日本大)・石丸辰治・岡本博通
- 21454 剛性低下型構造物の制震改修に関する研究
平野賢司(日本大)・石丸辰治
- 22044 筋かいを有する木質耐力壁に関する実験的研究 LVL材と集成材を用いた実大耐力壁のせん断実験を通して(その1)実験概要と試験結果
小室徹郎(三井木材工業)・平山善吉・斎藤俊一・荒井 淳・宮澤裕紀

- 22045 筋かいを有する木質耐力壁に関する実験的研究 LVL材と集成材を用いた実大耐力壁のせん断実験を通して
(その2)試験結果の比較・検討, および数値解析結果
宮澤裕紀(日本大大学院)・平山善吉・斉藤俊一・小室徹郎・荒井 淳
- 22337 鉄骨柱の塑性変形能力に対する材端補強効果の数値実験 高橋弘樹(日本大)・ギバトリシア・韓 昶・半貫敏夫
- 23033 ファイバー法を用いた非線形地震応答解析に基づくRC建物の損傷評価(その1)RC造骨組の地震応答解析
田島徹也(東洋エンジニアリング)・白井伸明・森泉和人・森谷 寛・井上博登
- 23034 ファイバー法を用いた非線形地震応答解析に基づくRC建物の損傷評価(その2)RC造骨組と損傷解析
森谷 寛(日本大大学院)・白井伸明・森泉和人・井上博登・田島徹也
- 23035 ファイバー法を用いた非線形地震応答解析に基づくRC建物の損傷評価(その3)兵庫県南部地震で被災したRC建物の地震損傷解析
井上博登(日本大大学院)・白井伸明・森泉和人・森谷 寛・田島徹也
- 23248 RC造有孔梁の実験的研究(その1 実験概要)
室星啓和(建材試験センター中央試験所)・三橋博巳・白岩昌幸・清水 泰・高橋 仁・李 正浩・荒井一寿
- 23249 RC造有孔梁の実験的研究(その2 実験結果の検討)
白岩昌幸(建材試験センター中央試験所)・三橋博巳・室星啓和・清水 泰・高橋 仁・李 正浩・荒井一寿
- 23264 コンクリートのマイクロ・マクロ破壊挙動解析(その1)2次元粒子モデルの定式化
須賀啓晶(入江三宅設計事務所)・白井伸明・森泉和人・上岡 響・佐伯昭博
- 23265 コンクリートのマイクロ・マクロ破壊挙動解析(その2)骨材径および試験体寸法が異なるコンクリートの巨視的破壊特性
上岡 響(日本大大学院)・白井伸明・森泉和人・須賀啓晶・佐伯昭博
- 23278 ト型試験体と架構試験体の接合部の力学的挙動(その1 実験概要, 破壊性状)
溝上隆浩(セブテック建築研)・飯田誠次郎・岡田 満・浜原正行・末次宏光・崎山和隆
- 23279 ト型試験体と架構試験体の接合部の力学的挙動(その2 荷重変形関係, 塑性ヒンジ部と接合部の挙動)
飯田誠次郎(日本大大学院)・溝上隆浩・岡田 満・浜原正行・末次宏光・崎山和隆
- 23509 プレテンション・ポストテンション合成梁の曲げ耐力と破壊性状に関する実験的研究
山本剛史(日本大大学院)・丸野 浩・本岡順二郎・中山 優
- 23510 ハーフプレキャストPC梁のせん断強度に関する実験的研究 その1 実験概要および実験結果
斉藤こずえ(日本大大学院)・皆川光一・屋田研郎・本岡順二郎・中山 優
- 23511 ハーフプレキャストPC梁のせん断強度に関する実験的研究 その2 実験結果の検討
屋田研郎(日本大大学院)・皆川光一・斉藤こずえ・本岡順二郎・中山 優

環境工学

- 40011 建築音響関連JIS改定の動向 その6 建築物及び建築部材の遮音性能の評価方法 第2部:床衝撃音遮断性能(A1419-2)
木村 翔(日本大)
- 40013 マルチマイクロフォンシステムを用いた1/50縮尺音響模型実験手法に関する研究 ~その1 縮尺音響模型における仮想音源の抽出精度に関する検討~
木村文紀(日東紡音響エンジニアリング)・関口克明・羽入敏樹・鎌倉貴志・室橋又也
- 40014 マルチマイクロフォンシステムを用いた1/50縮尺音響模型実験手法に関する研究 ~その2 正四面体頂点法を用いた閉空間モデルにおける検討~
室橋又也(日本大)・関口克明・羽入敏樹・鎌倉貴志・木村文紀
- 40016 数値シミュレーションへの頭部伝達関数組み込みのための立体角分割方法
佐藤正之(日本大大学院)・木村 翔・渡辺充敏・吉田俊也・平野 滋
- 40017 残響音付加のための室内が拡散にいたる時間の簡易的予測
吉田俊也(日本電気コンストラクション)・木村 翔・渡辺充敏・佐藤正之・平野 滋
- 40018 反射音時間構造を考慮した残響音付加手法を用いた数値シミュレーションからの合成音場と実測音場との比較聴感実験
渡辺充敏(大林組技研)・木村 翔・吉田俊也・佐藤正之・佐藤豊成・坪井政義・平野 滋
- 40025 有限音線積分法を用いた半無限障壁背後における減衰量予測に関する検討 ~実験システムの検証と計算方法の理論的考察~
坪山 睦(日本大)・関口克明
- 40029 仮想音源分布の異なる舞台音場における舞台反射音の主観評価
廣瀬大輔(日東紡音響エンジニアリング)・木村 翔・橋本 修
- 40030 仮想音源分布の異なる舞台音場における客席からのはね返り音の主観評価
佐藤豊成(日本大大学院)・木村 翔・橋本 修・廣瀬大輔
- 40032 発声レートを考慮した音声伝達についての基礎的検討
橋本 修(日本大)・木村 翔

- 40035 残響時間と受聴レベルが音に包まれた感じに及ぼす影響
千葉 俊(高砂熱学工業)・木村 翔・橋本 修・羽入敏樹・横山恵津子
- 40036 反射音の空間バランスに着目した音に包まれた感じの定量化方法に関する検討
羽入敏樹(日本大短大)・木村 翔・橋本 修・千葉 俊・横山恵津子
- 40037 音に包まれた感じの定量化方法を用いた音響設計に関する一考察
横山恵津子(日本大大学院)・木村 翔・橋本 修・羽入敏樹・千葉 俊
- 40038 観測位置の僅かな違いによる音響指標化のバラツキに関する検討
鎌倉貴志(日本大)・関口克明・羽入敏樹
- 40051 商業空間の音環境に関する実態調査
重川佳子(穴吹工務店)・木村 翔・荘 美知子・唐沢 亮
- 40052 商業空間に関する音環境の重要性のイメージファクターについて
荘 美知子(日本大)・重川佳子・木村 翔・唐沢 亮・下斗米 淳
- 40053 商業空間の音環境に関する経験的評価と個人暴露量
唐沢 亮(日本大大学院)・木村 翔・荘 美知子・重川佳子・下斗米 淳
- 40062 集合住宅の外部騒音レベルと居住者意識
武田充弘(日本大大学院)・木村 翔・井上勝夫
- 40084 集合住宅の界壁・界床の遮音性能表示方法(案)の主要検討結果の報告 住宅性能表示制度(案)の概要
紹介
福島寛和(建設省建研)・井上勝夫・安岡正人
- 40086 建築物の床衝撃音の測定方法に関する検討
鶴沢久雄(建材試験センター)・古里 均・井上勝夫・安岡正人
- 40089 ボイドスラブを対象とした重量床衝撃音レベルの計算法の検討
井上勝夫(日本大)・木村 翔・豊田雅士
- 40091 住宅床のかたさ感覚を表す物理指標値の検討
矢後佐和子(大成建設)・木村 翔・井上勝夫・渡辺秀夫
- 40102 インピーダンス法を用いた床スラブの予測計算法と現場実測値の比較について
小田 聡(住宅・都市整備公団)・鎌田一夫・井上勝夫
- 40103 KC型スチールハウスの重量床衝撃音遮断性能の課題抽出 スチールハウスの諸性能に関する研究 その18
金子 昇(NKK京浜製鉄所)・二宮 淳・関根秀生・井上勝夫・木村 翔
- 40104 KC型スチールハウスの重量床衝撃音遮断性能の向上 スチールハウスの諸性能に関する研究 その19
関根秀生(日東紡音響エンジニアリング)・金子 昇・二宮 淳・井上勝夫・木村 翔
- 40105 木造3階建共同住宅の重量床衝撃音対策例
野池清美(高知県工業)・木村 翔・井上勝夫
- 40110 室用途別にみた住宅床の意識調査と感覚評価実験
中川志郎(日本大大学院)・矢後佐和子・木村 翔・井上勝夫
- 40111 住宅の床仕上げ構造の軽量床衝撃音レベル低減量と歩行感との関係(歩行感からみた居住床の適正弾性と床
衝撃音遮断性能に関する研究:その17)
渡辺秀夫(戸田建設技研)・木村 翔・井上勝夫・矢後佐和子・松岡明彦
- 40119 管路系における弁の発生音・振動特性に関する実験的検討
小林裕昌(日本大大学院)・河原塚 透・平松友孝・木村 翔・井上勝夫・大川平一郎
- 40120 管路系発生音・振動に対する消音器の低減効果に関する実験的検討
河原塚 透(大成建設技研)・平松友孝・木村 翔・井上勝夫・小林裕昌・大川平一郎
- 40187 膜構造物の昼紫外率について その1 紫外放射照度の計測報告
高橋浩一郎(日本大)・川西利昌・斎藤公男・加藤 学
- 40188 膜構造物の昼紫外率について その2 昼紫外率による日除け性能の評価
加藤 学(ハザマ)・高橋浩一郎・川西利昌・斎藤公男
- 40333 視環境評価における生理応答の導入に関する研究 その1 眼球運動導入による心理学的手法の有効性の検
討
合田奈緒子(日本大)・関口克明・鈴木直行・川浪大輔
- 40334 視環境評価における生理応答の導入に関する研究 その2 印象評価における眼球運動と評価の関係につい
て
川浪大輔(日本大)・関口克明・鈴木直行・合田奈緒子
- 40489 RC造集合住宅の居住下在室時・空室時における室内環境の実態と評価法に関する検討 その1 温熱環境の
経時変化と6ヶ年間の経年変化からの考察
吉野泰子(日本大短大)・関口克明・田中和之・島宗淳一郎
- 40490 RC造集合住宅の居住下在室時・空室時における室内環境の実態と評価法に関する検討 その2 空気環境の
経時変化と6ヶ年の経年変化からの考察
田中和之(日本大大学院)・関口克明・吉野泰子・島宗淳一郎
- 41488 高等学校家庭科における住居教育の現状に関する調査研究(その1)
田中辰明(お茶の水女子大)・村川三郎・佐野武仁・森川元樹・光田 恵・吉田 燦
- 41489 高等学校家庭科における住居教育の現状に関する調査研究(その2)滋賀県の教員に対する調査
光田 恵(大同工業大)・村川三郎・佐野武仁・森川元樹・田中辰明・吉田 燦
- 41547 実験動物施設の環境制御について(第 報 ケージ内温度制御と従来型室内温度制御の比較)
石井要憲(ダイダン技研)・吉田一也・吉田 燦・長谷川雅一・蜂巣浩生・板橋友佳・朱宮正剛

建築計画

- 5053 東京都内博物館でのマルチメディア展示の設置状況について 博物館におけるマルチメディア展示についての研究 その1 平林みか(フリー)・青池佳子・本杉省三
- 5054 来館者のマルチメディア展示に対する鑑賞行為について 博物館におけるマルチメディア展示についての研究 その2 中原慶之(日本大)・平林みか・青池佳子・本杉省三
- 5057 銀行室を中心とした近代銀行建築の事例研究 建築の転用保存に関する建築計画的な研究 その1 中村光恵(新建築社)・若色峰郎・渡辺富雄
- 5091 野外上演施設における利用内容 野外上演施設の現状についての基礎的調査研究(その3) 高波鉄太郎(日本大)・青池佳子・本杉省三
- 5092 野外上演施設における建築計画 野外上演施設の現状についての基礎的調査研究(その4) 青池佳子(日本大)・高波鉄太郎・本杉省三
- 5101 建築計画条件からみた「学校通論」に関する考察 「学校通論」にみる小学校建築計画条件に関する考察 その1 馬渡 龍(日本大大学院)・新川亮馬・関澤勝一
- 5102 「学校通論」と学校建築法との関連性に関する考察 「学校通論」にみる小学校建築計画条件に関する考察 その2 新川亮馬(久米設計札幌支社)・馬渡 龍・関澤勝一
- 5107 小学校の学区域とその形状に関する考察 小学校の施設再整備に関する研究 その3 岡田真人(日本大大学院)・関澤勝一・佐藤直樹
- 5144 肢体不自由児の交流レベルに影響を及ぼす要因分析 障害児交流教育を考慮した学校建築計画に関する基礎的研究 3 矢代瑞昌(横浜市総合リハビリテーションセンター)・野村 歡・八藤後 猛
- 5182 横浜市地区センターにおける兼用利用の実態について 生涯学習空間の建築計画に関する研究 その1 中村敏子(安井建築設計事務所)・若色峰郎・渡辺富雄
- 5229 ビデオ観察手法に関する一考察 ビデオ解析手法による日常生活動作に関する基礎的研究 その1 島崎 武(日本大大学院)・古瀬 敏・野村 歡・土生多恵子・八藤後 猛・田中 賢
- 5230 ビデオ解析手法を用いた建具通過動作の考察 ビデオ解析手法による日常生活動作に関する基礎的研究 その2 土生多恵子(日本大大学院)・島崎 武・野村 歡・田中 賢・八藤後 猛
- 5231 多変量解析による長寿社会対応住宅の有効性の検証 長寿社会対応住宅設計指針の有効性に関する研究 2 田中 賢(日本大大学院)・古瀬 敏・野村 歡・八藤後 猛
- 5233 在宅酸素療法施行者の日常生活動作と住環境に関する調査 石川 朗(日本大大学院)・野村 歡
- 5240 視覚障害者の歩行環境バリアフリー化に関する研究 国内外における音声誘導装置の現状と今後の施策について 島宋淳一郎(日本大)・関口克明・吉野泰子・野中俊宏・野村みどり・屋敷 知
- 5250 授産施設, 小規模作業所の施設環境の実態に関する調査・研究 職業リハビリテーション施設の建築計画に関する研究 1 八藤後 猛(日本大)・野村 歡
- 5582 シルバーピアにおける日常生活から現れる建築物の問題点の把握 ワーデンからの自由意見を中心として 村井裕樹(日本大大学院)・石川弥栄子・八藤後 猛・野村 歡
- * 5681 多方向アクセス型集合住宅の類型に関する研究 裏口アクセス空間のタイプによる分類 馬野宏貴(日本大)・宇杉和夫

都市計画

- 7110 敷地条件からみた街並み誘導型地区計画制度の運用手法に関する研究 その1. 敷地規模の違いによる建替えシミュレーションを通して 鬼山 功(日本大大学院)・丹藤 玲・浅川貴史・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 7111 敷地条件からみた街並み誘導型地区計画制度の運用手法に関する研究 その2. 小規模敷地の建替えシミュレーションの検討 浅川貴史(日本大大学院)・丹藤 玲・鬼山 功・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 7199 横浜市馬車道商店街における「まちづくり」の変遷に関する研究(その1) 街路空間の変容を中心に 岩松正剛(日本大大学院)・鈴木菜穂子・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 7200 横浜市馬車道商店街における「まちづくり」の変遷に関する研究(その2) まちづくりの段階による考察 鈴木菜穂子(早稲田大大学院)・岩松正剛・小嶋勝衛・根上彰生・宇於崎勝也
- 7270 山と海の空間軸 と 鳥空間 の生成・認識に関する研究 熊野・紀伊の島の祭祀空間と船の祭り 宇杉和夫(日本大)

- 7345 都市の空間軸と空間構成の手法に関する研究 大宮・浦和地区(さいたま新都心)の景観軸構成の検討
塚部 彰(アトリエ空間組織)・宇杉和夫
- 7472 北海・バルト海に面するハンザ同盟都市の空間形態の事例 中世ヨーロッパの同心円型都市・集落モデルの
形態分析に関する研究 原 陽介(日本大大学院)・宇杉和夫

建築経済・住宅問題

- 8046 阪神・淡路大震災における建物損害実態の調査研究 その1 神戸市灘区の震災直前の建物概要
森本和樹(日本大)・吉田倬郎・加藤裕久・三橋博巳・高橋純一・若井真幸・小松幸夫
- 8047 阪神・淡路大震災における建物損害実態の調査研究 その2 神戸市灘区の建物損害実態
若井真幸(日本大)・吉田倬郎・加藤裕久・三橋博巳・高橋純一・森本和樹・小松幸夫

建築歴史・意匠

- 9046 中世伊勢神宮における造営組織について その1 作所と小作所 浜島一成(日本大短大)
- 9088 明命帝陵内,主要建築物の寸法計画について ヴェトナム・フエの明命帝陵の総合調査 その9
半谷彰英(池原義郎建築設計事務所)・片桐正夫・重枝 豊・大山亜紀子
- 9089 右従祀木軸部における番付構成について ヴェトナム・フエの明命帝陵の総合調査 その10
重枝 豊(日本大)・片桐正夫・半谷彰英・大山亜紀子
- 9090 仏教寺院の伽藍配置と一間堂に関する考察 ベトナム仏教寺院の総合調査 その2
大山亜紀子(日本大)・片桐正夫・重枝 豊
- 9096 新様式導入に関する一考察 李朝時代木造建築の柱心包系及び多包系別に見た架構形式について(その14)
片桐正夫(日本大)
- 9102 韓国における近代建築の保存に関する一考察 文化財保護行政の歩みのなかで 李 芝海(日本大)・片桐正夫
- 9105 アンコール・ワット西参道の内部構造について 崔 炳夏(日本大)・三輪 悟・片桐正夫
- 9158 ドイツ工作連盟の会則制定について 田所辰之助(日本大短大)
- 9174 蔵田周忠の海外渡航(1930~31)と執筆活動について 「国際建築」誌への連載を中心とする考察
矢木 敦(日本大)・大川三雄
- 9181 造形芸術雑誌「建築紀元」の概要と特徴について 建築専門出版社・構成社書房の出版活動に関する研究
その1 川嶋 勝(日本大)・大川三雄・矢代真己
- 9182 雑誌「建築時潮」と性格について 建築専門出版社・構成社書房の出版活動に関する研究 その2
矢代真己(日本大)・大川三雄・川嶋 勝
- 9326 戦後におけるアイデア提案型建築設計競技の実施動向と評価 小石川正男(日本大短大)



第8回・桜建会・学生設計コンクール・審査報告

第8回の桜建会・学生設計コンクールは、「2001年の方丈 - 自分で組み立てる住まい - 」をテーマに開催された。審査員は下記の方々である。

本杉省三（理工学部助教授，審査委員長）
水谷硯之（アーキブレン建築研究所主宰）
泉 幸甫（泉幸甫建築研究所所長）
飯村和道（ダンス代表取締役）
アストリッド・クライン（クライン・ダンス・アソシエイツ）

9月30日（水）の応募締切までに52点の応募案が寄せられたが，その内訳は，理工建築26点，理工海洋7点，理工短大6点，生産工学部9点，工学部4点である。10月3日（土）に審査会が行われ，最優秀1点，優秀4点，佳作3点が選出された。

以下，10月3日（土）に行われた審査会の経過を辿ってみたい。

審査会開催前の作業として，各学部より寄せられた応募案に対しランダムに審査番号を打ち直した上で製図室に展示。10時30分，審査員の方々が集まれたのを機に，審査委員長と審査会の進め方等について話し合いを行った。その結果，午前中に応募案を20点以内に絞り込むこと，午後はそれらの作品を公開審査会の形式で進めることなどが確認された。

午前中に行われた第1段階の審査においては，審査員一人5点ないし6点を選んでいただき，その結果，一票以上の得点を得た下記の18点を選出した。番号は審査番号，（ ）内は登録番号。



【最優秀案】

審査番号 49 番 住谷 寛（理工大学院 1 年）

【優秀案】

審査番号 18 番 田中宏明（理工大学院 2 年）
審査番号 20 番 藤本常雄（理工建築 3 年），奴留由 歩（同）
審査番号 44 番 田中宏明（理工建築 3 年），黒川千聡（同）
審査番号 45 番 関根知徳（理工建築 4 年），相馬正則（同）

【佳作】

審査番号 16 番 鈴木穂高（理工建築 4 年）
審査番号 32 番 植原淳一（理工大学院 1 年）
審査番号 52 番 井上友亮（理工大学院 1 年），
大橋史人（同）

3 番（海洋 6）寺田 健（海洋 3 年），福田尚史，
江橋亜希子
7 番（理工 8）佐藤崇文（理工院 1 年），近藤創順，
松崎正寿
10 番（理工 11）梶 隆之（理工建築 4 年）
16 番（理工 23）鈴木穂高（理工建築 4 年）
18 番（理工 26）田中宏明（理工院 2 年）
19 番（海洋 1）長井 厚（海洋院 1 年）
20 番（理工 16）藤本常雄（理工建築 3 年），奴留由 歩
21 番（海洋 2）市原裕之（海洋院 1 年）
29 番（生産 3）染谷佐登子（生産 4 年），土屋みゆき，
細淵浩子
31 番（生産 8）瀬戸健似（生産院）



- 32番(理工4)植原淳一(理工院1年)
- 37番(生産9)堤 政雄(生産院1年),高橋 理
- 39番(理工5)中山 農(理工建築4年)
- 44番(理工12)田中応明(理工建築3年),黒川千聡
- 45番(理工24)関根知徳(理工建築4年),相馬正則
- 49番(理工9)住谷 覚(理工院1年)
- 50番(理工21)中原英隆(理工建築3年)
- 52番(理工18)井上友亮(理工院1年),大橋史人

第2段階の審査会は、13時より5号館5階の製図室において公開審査の形式で行われた。30名近い学生の見守るなか、第1段階で選ばれた18点の作品が展示され、その1点1点について、順を追って審査員よりの感想・意見を交換し合った。その後で、審査員一人から3点を推薦していただくことで、下記の上位8点を選出された。()内は推薦された委員名。

- 16番(泉)
- 18番(水谷,飯村,クライン,本杉)
- 20番(クライン)
- 32番(水谷)
- 44番(水谷)
- 45番(泉,本杉)
- 49番(飯村,泉,クライン,本杉)
- 52番(飯村)

続いて、最終段階の審査に入った。上位8点のうちより、最優秀案をまず決定することとし、そのために審査員一人1点として、挙手で意志表示をお願いした結果、下記のような結果となった。

- 16番(泉)
- 18番(水谷),
- 49番(本杉,クライン,飯村)

この結果に対し、泉委員および水谷委員も、賛意を示され、この時点で49番を最優秀案とすることが決定さ



れた。

次に優秀案の審査を行ったが、上位8点の中より、最優秀案49番を除く7点を対象に、一人1点を選んでいただき、下記の4点が推薦されたことから、これらを優秀案と決定した。

- 18番(本杉,飯村)
- 20番(クライン)
- 44番(水谷)
- 45番(泉)

この結果を受け、上位8点のうちの残り3点が佳作と決定された。

- 16番,32番,52番

この後、5号館5階製図室を会場として表彰式および懇親会が行われた。(文責:大川三雄)

全体講評

「2001年の方丈 - 自分で組み立てる住まい - 」というテーマをしっかりと考えてきてくれた案と、コンペの主旨文をきちんと読んだのかどうか疑わしい案があった。つまり、「方丈記」くらいは読んで参加してほしいのに、ただ住宅を設計することになってしまっていた案があったことは、正直がっかりした。

しかし、とってファンタジーに富んだ空間を感じさせる内容のものもあった。単純な中にも豊かさを感じさせるもの、自然な材料をごしごし手で作る感覚を表したもの、近未来の技術をもって可能とするもの、などさまざまに構想された方丈が発見できた。方丈記における鴨長明の生き方を世捨て人と捉える見方、あるいは最も進んだ文化人として考えることから案を発展させたものなど、方丈での生き方から迫ろうとするものまであって、いろいろな角度で審査を楽しみながら行うことができたことは、参加してくれた学生たちの賜物であり、大変嬉しかった。(審査委員長・本杉省三)



建築家・三浦周治都市・建築展の開催

今年の5月29日、本学出身の建築家・三浦周治さんが逝去されました。本学出身の若手建築家のホープとして建築作品のみならず、数々のコンペへの参加、雑誌への投稿など、まさに七面六臂の活躍を続けていただけに、その突然の死は、友人や同僚たちに大きな衝撃を与えました。あれから4か月、三浦さんを慕う友人たちによって実行委員会が組織され、11月3日より5日間にわたる三浦周治都市・建築展として開催されました。

初日である11月3日には、故人が残した「社会資本としての都市住宅構想」と題されたテキストを元に、その問題提起を共有する形でシンポジウム「都市・建築デザイン・セッション '99」が5号館5階スライド室で行われました。

シンポジウムの終了後は、場所を展覧会場に移し、オープニング・パーティが行われましたが、この会場となったお茶の水スクウェアは、三浦さんが磯崎アトリエ時代に担当されたものです。この展覧会にあわせ、作品集『時代の意志 三浦周治』も刊行されています。

なお、今回のフォーラムが端緒となった「都市・建築デザイン・セッション '99」は、基幹テーマ「社会資本としての都市住宅」を共有して、関東・関西地区で約半年にわたるワーク・ショップの活動が始まる予定です。

(編集委員会)



▶▶▶ 駆けぬげる意志

「時代の意志」三浦周治君がまだ大学生の時に書いた著述の一節からこのタイトルは名付けられた。スタイリストで生意気な彼のことから、こんなもんじゃないかと粋がって見せるかも知れないとは思うけれど、でもやっぱりこの言葉に込めた彼の気持ちは、たとえ年月が経過しても変わらないものだろうと思う。彼の建築や都市に対する意気込みがこの言葉に託され伝わってくるような気がする。きっと彼が最も好きな身近な言葉の一つだったに違いないと想像してタイトルとした。時代の寵児たらんとした彼が無念にも早く逝ってしまっただけで、ただ驚き悔しく、その無念さを何か形にできないかとアトリエに集まってその仕事ぶりを改めて前にしてみた。実現された建築の模型とともにコンペティション参加作品の多さに、彼の建築や故郷への思いが

感じられた。北上川博物館構想に見られるような、頼まれもしないものにまで注がれた情熱もある。

しかし、何にも増して、彼との交流の中で印象的だったのは、そうした熱っぽさであり、都市や建築について語っている彼の真摯な態度ではなかったのか。そんなことを彼が書き続けてきた文章・スケッチの脇に素早いタッチで書かれたコメントなどに目を通しながら思った。

大学および大学院そしてGSDと一貫して都市デザインを学び、初めて実務として働き始めたところが磯崎アトリエであった。独立後、デザインした設計および計画案は作品集に見られる通りである。それらを振り返ってみると、彼が目指した建築家像そのものを表しているような気がしてくる。来るべき都市像を描きながらも都市デザインの可能性に限界を感じ、建築デザインに回帰せざるを得なかった70年代に大学を卒業し、時代の潮流を肌で感じた者と

して、やはり彼も建築にこだわった。しかし、都市を語るときの三浦周治君は特に雄弁で、都市的な観点から考察したグランドデザインの必要性和希望を描き続けた、まさに提案型の人間であったといえるのではないだろうか。

一見鼻っぺしの強い彼は、攻撃的なようであり、実はいつだって喋りたいことがいっぱい、少年のような純な気持ちと細やかな心遣いの演出家だった。プラグマティックな鋭さの中に、思いやりと優しさを感じられ、それがジャンルや年齢を超えて友人を親しい輪にさせた。作品集と展覧会もその一つの現れである。これらもまた三浦周治君の成果であり、作品である。

ちょっと照れながら垣間見せる彼の自信と活気が伝わってくるものと思う。未完だったかも知れない、未熟だったかも知れない、でもそれ以上に輝きを見せたことを友人として誇りに思う。

1998.11.3 三浦周治都市・建築展実行委員会

平成10年度「建築展」

11/1 ~ 11/3



今年の「建築展」は、建築構造デザイン研究会を主体として構成された20名の実行委員会メンバーと計画系大学院生有志6名によって企画・運営された。この建築展は例年のように理工学部青駿祭の一環として行われたので、予算は青駿祭からの割当てと工科校友会建築部会からの補助および特別企画のチケット代によって賄われた。

企画は5号館5階製図室2区画を使って3日間にわたって行われた「建築学科・研究室紹介」のパネル展示と、11月3日午後1号館2階会議室で行われた特別企画「講演会+シンポジウム」に大別される。

「研究室紹介」のパネル展示は建築展実行委員会単独の企画・運営で、「駿建」などを参考にして全研究室の概要を紹介したが、各研究室からの協力に

よるパネル・作品出展の質・量が揃わず、全体としてあまり統一がとれた展示とならなかった。

また、会期中、一般学生の参加も少なく、実行委員会メンバーの熱意と比例する盛り上がりには欠けたきらいがある。

一方、11月3日に行われた特別企画の「講演会+シンポジウム」は、建築展実行委員会と建築学専攻の計画系大学院生有志との共同企画で、佐藤慎也助手の強力なバックアップが効いて、学生約150名が出席する盛況であった。

第部の講演会は「住宅設計」を対象にして、「生活のデザインは建築のコンセプトたりうるか？」という共通テーマで二人の講師からそれぞれの思想を引き出そうというもので、青木淳建築設計事務所の青木淳氏と黒沢隆研究室の黒沢隆氏が招へい

され、それぞれ約1時間の講演を行った。続いて第部は、大学院生馬渡龍君の司会による同じテーマのシンポジウムで、パネリストには第部の講師、青木淳、黒沢隆両氏に佐藤慎也助手が加わって、活発な議論が展開された。

シンポジウム終了後、同会場で講師と参加学生による懇親会が行われた。なお、この日の総合司会は大学院生の田中利行君が担当した。

以上、今回の建築展の企画・準備・運営に参加した学生諸君の熱意と努力に敬意を表しつつ、略式報告を終える。

(編集委員会)

こうして毎年繰り返される学生有志諸君の努力の足跡が、効率よく後輩に伝えられるような一つのシステムができるとよいですね(蛇足)。

【『駿建』の学生編集委員に参加して下さい!!】

『駿建』は建築教室と学生との間をつなぐパイプ役を目的に、年4回刊行されている小冊子です。大学のさまざまな年間行事はもとより、設計製図や建築実験、卒業研究などの重要な情報を皆さんに伝える大切な学科内報です。

とかく建築教室から皆さんへの、一方通行の情報に終わりがちな傾向があることから、今回、学生有志の方々にも企画・編集に参加していただくことにしました。魅力ある開かれた紙面をつくるお手伝いをして下さい。

興味のある方は奮ってご参加下さい。(編集委員会)

1. 主な仕事は、年間3回から4回の編集企画会議への参加です。
2. 各学年から2名
(1組, 2組それぞれ1名)
3. 希望される方は、下記の編集委員に申し出て下さい。
半貫敏夫(432 A室), 大川三雄(587室), 岡田章(439 C室), 蜂巣浩生(453室)

大学院1年の**為田悟君**（建築史・建築論研究室所属）は、「歴史都市の保存と共存 歴史を生きた名建築の再生」をテーマに行われた公開設計競技において、佳作入選を果たした。

この競技は、世界建築博覧会奈良の第3回イベント建築トリエンナーレ奈良1998の開催に当たって実施されたもので、審査員は黒川紀章（顧問）、藤森照信、岸和郎、隅研吾、妹島和世の各氏。

斎藤公男教授をコメンテーターとする「構造デザインフォーラム」が平成10年7月10日（金）建築会館において開催された。このフォーラムは、日本建築学会関東支部構造専門委員会の主催で、毎年一回実施されている。斎藤教授が企画とコメンテーターを務めるのは、今年で4年目。「これからの構造設計・構造設計者のあり方」をメインテーマに、ゼネコンや事務所の構造設計者・デザイナーを招いて、パネル・ディスカッション風を実施している。

今年のテーマは「構造設計をとりまく技術」。鋼鈎やケーブル、ガラス、アルミニウムなどのメーカーで活躍されているエンジニアの方々を招き、これまでの活動とこれからの技術の行方などについて、会社の枠組を越えた本音交じりの講演の後、会場を巻き込んだ活発な議論が行われた。

斎藤公男教授は、9月3日（木）から5日（土）まで神戸にて開催されたIABSE Symposium（国際橋梁構造学会）において、建築界を代表して“Role of String - Aesthetics and Technology of Tension Structures”のタイトルで基調講演を行った。

石川弥栄子大学院生、**八藤後猛**助手、**野村敏教授**連名の原著論文「シルバーピア居住者の年齢別にみた健康および日常生活状況の考察 シルバーピアの居住状況に関する研究 その1」が日本建築学会計画系論文集第510号（1998.8）に掲載された。

渡辺秀夫氏、**木村翔**教授、**井上勝夫**助教授、大学院OBの**石井健太郎**君連名の原著論文「住宅の床仕上げ構造の振動応答特性と床衝撃音遮断性能との関係」が日本建築

教室ぶろむなード

学会計画系論文集第511号（1998.9）に掲載された。

平石信也氏、**横山清短**大教授、**笠井芳夫**生産工学部教授連名の原著論文「高強度高流動コンクリートの初期の乾燥による質量減少と自由収縮に関する研究」が日本建築学会構造系論文集第511号（1998.9）に掲載された。

新谷隆弘専任講師、**石丸辰治**教授連名の原著論文「刺激関数概念による新しいモデル・フォロイング法の構成と構造物の応答制御について」が日本建築学会構造系論文集第512号（1998.10）に掲載された。

さる7月に平成10年度の企画経営コース学生36名が正式に決まり、後期からの専門科目を選択受講することになった。

8月18日～9月9日までの間、A、B、2コースに分けて実施された第30回建築学生海外研修旅行（各コースとも22日間）は大きな事故もなく終了、全員元気に帰国した。詳細は『駿建』1月号（学期末号）に報告される。新年度も新たなコースで企画・実施される予定なので、新3年生は今からぜひ夏休みのスケジュールを検討されたい。

建築学科新カリキュラムに従って、平成12年度から正式にスタートする「ゼミナール」（1単位）を、遡って本年度後期から「試行」することになり、クラス担任の先生方の努力によって、3年次生へのガイダンス、各研究室のテーマ公開、申込み手続きを経て、10月初めから各研究室での実質的なワークが始まった。正式スタートまでの2年間でいろいろな問題点を洗い出し、システムを確定する方針である。

10月20日（火）の午後2時40分から5時50分まで、中国西安建筑科技大学の**劉加平**教授と**王竹**教授の講演会が1号館2階第2会議室で行われた。この講演会は建

築学専攻の平成10年度大学院特別講義として**関口**克明、**吉田**燦両教授の企画により実施されたもので、教室の先生方、大学院生、学部の卒業研究生が多数聴講した。劉教授の講演テーマは「気候と中国伝統住居」、王教授は「中国黄土高原の風土とヤオトン」で、共通するキーワードは「ヤオトン」であった。ビデオ、OHP、スライドを用いたヴィジュアルな講演で、中国の気候にマッチした伝統的住居とヤオトンをわかりやすく解説していただいた。

ヤオトンは中国西北部黄土高原に広く分布する独特の地中住居形式で、現在も4000万～5000万人がここで生活しているという。しかし住民の経済・生活水準が向上しつつあるなかで、ヤオトンにおける伝統技術の優れた点を継承しながらその近代化を図り、生活環境をよりよいものとし、省エネルギーを実現しながら持続的発展を目指す国家プロジェクトが推進されており、両先生はその重要スタッフとして活躍中である。この度、日本大学理工学部と西安建筑科技大学間の学術交流協定に基づく交換教員として来日し、本学に滞在中である。

また、昨年、交換教員として訪中した**吉田**教授、同様に今年の夏、西安に滞在中の**関口**教授らを中心として理工学部と西安建筑科技大学との「ヤオトン」に関する共同研究が具体化されつつある。

11月13日（金）に恒例の平成10年度理工学部学術講演会（第42回）が船橋校舎を会場にして行われた。本年度の発表論文題数合計は636件、建築学科、短大建築コースの先生方や大学院生が日頃の研究成果を発表した。加えて、卒業研究生が指導担当の先生に見守られつつ、緊張しながら研究成果の速報を発表する姿も見られた。

建設景気の低迷が定常化するなかで、建築教室でも卒業予定者の就職対策に頭を痛めているが、平成11年度卒業予定者（現3年生と大学院1年生）を対象とした第1回建築学科就職ガイダンスが11月19日（木）に行われた。年明けにもう2回の説明会が予定されている。

駿建目次

（1998.11 Vol.26 No.3 通巻103号）

学生座談会：卒業制作への提言	2	建築家・三浦周治都市・建築展の開催	14
1998年度日本建築学会大会（九州）		平成10年度「建築展」	15
建築学科教室関係者発表論文リスト	6	教室ぶろむなード	16
第8回校建学生会設計コンクール 審査報告	12		

『駿建』 発行者・斎藤公男：千代田区神田駿河台1-8 日本大学理工学部建築学科教室 Tel.03(3259)0724 <http://www.arch.cst.nihon-u.ac.jp>
平成10年度編集委員：半貫敏夫・岡田 章・大川三雄・蜂巢浩生・羽入敏樹 印刷：奥村印刷株